

## 形態音韻論的観点からみた一八世紀初頭の薩隅方言 ：助詞「の」の撥音化について

江口, 泰生  
鹿児島大学教育学部講師

<https://doi.org/10.15017/15484>

---

出版情報：文献探究. 23, pp.18-29, 1989-03-20. 文献探究の会  
バージョン：  
権利関係：

# 形態音韻論的観点からみた一八世紀初頭の薩隅方言

— 助詞「の」の撥音化について —

江口泰生

## 一 はじめに

これまでの国語史がもっぱら京都を中心とする言語をその対象としていたのに対し、論理的には同時に地方の言語そのものを対象とする国語史がありうべき事は既に先学の説くところである。

しかし、再構を進めるための資料については中央語の文献の圧倒的優勢は否めない。量は勿論の事であるが、質的にも地方語をそのまま用いる文献は数少なく、文語的表現の中に散発的に出現する方言形を頼りに再構を進めなければならないからである<sup>\*)</sup>。しかし、地方語の文献においても口語的要素にあふれた文献もないではない。この事はとりもなおさず、方言史を再構するための障害とされる資料的制約という面は、多分に偶発的な物理的な要素の問題なのであって、本質的な差異とはなし難い事を意味しているのではなからうか。

この点はともかく、一八世紀初頭の薩隅方言の資料であるゴンザの諸著作も極めて口語的要素にあふれた資料の一つと言える。本稿では、ゴンザの諸著作を資料として薩隅方言の史的展開の一端を明らかにしたいと思う。

## 二 助詞「の」の撥音化

— 『日本語会話入門』の場合 —

ゴンザの諸著作<sup>\*)</sup>のなかでも『日本語会話入門』<sup>\*)</sup>は特異な価値を有すると思われる。というのは他の著作が比較的語彙集としての色あいを有するのに対して、『日本語会話入門』は次の例にみえるようにロシア語の文を薩隅方言で訳した文例集であるからである<sup>\*)</sup>。

11 *МРАКМО АРЬ ТУКА*

／облакь есть вдаленъ

( *мракмо ар тука* / 雲 ある 遠く )

3 *АРГЛУЧЬ ШИНАНТ*

／аргль бесчертннъ

( *аггльч* *инант* / 天使 なしに 死の )

しかし、上の11の例によっても分かるようにその訳の仕方は多分に直訳的であり、従ってこれまでは音声やアクセントといった音韻論的な観点によって利用される事が多かったようである<sup>\*)</sup>。確かに例文11において、「雲は遠くある」という意味のロシア語の文を「むらくも ある 遠か」と訳するなどはロシア語の語順のとおりに単語を並べており、逐語訳的な様相をみせるものと言って良いように思われる。「むら雲 ある 遠か」という文の語順や例文3の「*аггльч* 死なんと」という文の「*аггльч*」という句と「死なんと」という句との結び付き方に関しては、自然の言語の反映と

はやや見做しがたいのである。しかし一方で、例文3においては「死のないもの」という意味の文を「死なんと」「と」は準体助詞」と訳するように、一句のなかにおいては薩隅方言の自然な露呈と思われれるものもあるようにも思えるのである。

つまり、語順や句と句との結び付き方などに関しては、ロシア語を直訳する傾向が強いので必ずしも自然な薩隅方言の統語論的資料とはし難い面があるのであるが、それぞれの句の内部における語と語との結び付きにおいては一八世紀初頭の薩隅方言の自然な形が現れているように思われるのである。これは恐らくゴンザの訳の仕方と直接に関係しているのではなからうか。ゴンザはロシア語の文をその全体の意味を考えて意訳するという方法を採用せず、一句づつ自分の言葉で置き換えていったものと思われる。その結果、句と句との結び付き方はきちない直訳調とならざるをえなかったのであるが、一句づつをみれば薩隅方言の極めて自然な形態がみられると考えられるのである。

さて、この『日本語会話入門』を通過すると、

6 какя наханть

(какя наханть / 風は中のと)

のように助詞の「の」にあたる部分が「n」で表記される場合と、

15 фарно фироккака мата шемекка

(farno firokakaka mata semecca / 原の広かか又狭いか)

のように「no」で表記される場合とがある。何故、助詞「の」に「n」のような二種の表記が出現するのであろうか。この二種の表記には意味があるのであろうか。意味があるとすれば、具体的にどのような意味があるのであろうか。

そこで『日本語会話入門』に出現する全ての助詞「の」を、(1)

「n」で表記されるものと、(2)「no」で表記されるものとに分類し、その前接語とともに示すと以下のとおりとなる。

助詞の「の」を「n」で表記するもの

9 nakant (中のと)	24 tadanto (直のと)	29 fadan (肌のと)
69 onankon (女の娘のと)	69 onankon (女の娘のと)	78 mo non (物のと)
168 munen'ja (胸の下)	170 katataran (片腹のと)	195 faranfoka (腹の木か)
210 čaran (力のと)	249 fnen (船のと)	278 konatan (うなたのと)
318 kona tanje (うなたの家)	331 fodokēn (仏のと)	338 fton (人のと)
340 fodokēn (仏のと)	343 fodokēn (仏のと)	39 8 monon (物のと)
408 bidoront (ウーエロのと)	432 un ajenkē (うなじの毛)	459 soj emkendog (御前迎えの道具)
467 toton (父のと)	522 fodokēn (仏のと)	526 čunkot (中の事)
545 tofnaton (年人ののと)	560 kanēnkot (金の事)	562 fodokēn (仏のと)
563 ftonto (人のと)	564 ftonto (人のと)	589 jfante (トのと)
613 fo dokēn (仏のと)	619 fodokēn (仏のと)	

2 助詞の「の」を「no」で表記するもの

A

序文 togučno (戸口のと)	序文 nifomo (日本ののと)	序文 nifomo (日本ののと)
序文 konattačno (うなた達のと)	15 farno (原のと)	41 asag'not (あやぎ色のと)
50 k ak'no (柿のと)	57 snofogeta (酔のほびた)	66 jag'no (山羊のと)
67 jag'no (山羊のと)	71 k'jakno (客のと)	75 fino (屏のと)
76 jok'no (客のと)	78 farno (原のと)	81 fonnokotka (本の事か)
86 kinno		

(金)	87 gimno (銀)	90 jino (石)
155 agnoʃta (顎)	169 wak'noʃta (脇)	171 wa
k'noʃta (脇)	203 u'no (内)	209 um'no (臆)
246 mi'nomana (マ)	(路)	254 mi'nomana (
道の)	301 fonoko (本)	312 katak'no (敵)
335 furnotto (古)	(ト)	336 kamo (神)
8 mukaj'nekot (昔の事)		378 nifomo (日本の)
387 sa		389 grammatik'no (グラマティック)
jno (指)	415 ftomo (布団)	425 kam'noke (髪の毛)
465 uc	478 kun'nofta (国の人)	481 kun'no
nofta (家の人)	482 fonno (本)	484 fonnokot (本の事)
(国)	490 kamo (神)	495 u'nomono (家のものを)
497 u'nofta (家の人)	498 iksani	544 anoj'nekot (あ
の衆の事)	563 fonnofta (本の人)	599 fonnofte (本の人
に)	601 fonnofta (本の人)	604 dojnokota (同士の事
は)	611 nifomo (日本の)	

B

16 jeno (家の)	89 kino (木の)	110 kinocupsa (木
の株)	162 'enofara (牛)	407 janosorat (家
の)	476 ono (王)	580 funojokakot (風の)
序文 karakuino (か)	160 fidaino (左)	

右の例を通覧して先ずわかる事は、(1)は助詞「*no*」に前接する単語の語末が母音に限られており、(2)はBの例を除外すれば「*no*」に前接する単語の語末が子音に限られているという事である。(2)のBだけが前接する単語の語末が母音でありながら、「*no*」

となっているのが例外的である。この(2)―Bを一応例外として除いておくと、前接の単語の語末の違いによる「*n*」と「*no*」の使い分けが極めて規則的に現れており、例外は全くないといって良い状況を指摘出来るのである。

しかし一方で、例外が全くないという事はかえって表記的な規則であったという疑いも生じないわけではない。本稿の筆者はロシア語に関する知識を持ち合わせているわけではないが、例えばロシア語には子音の連続を嫌うという傾向があって、その傾向が日本語の転写の場合に露呈してしまったという可能性も考えられないではないからである。従って、(2)―Bの例外については後で説明するとしても、「*n*」と「*no*」の書き分けが果たして表記的な規則以外の、日本語の、更に限定していえば薩隅方言の実際の言語と関係あるものかどうかという事が確かめられなければならないであろう。その上で、この事象を現在の薩隅方言と比較したり、地方の方言史に位置付けたり、というような諸々の事が研究対象として挙がってくるという事にならうか。

「*n*」と「*no*」が出現する分布の条件は右に述べたとおりであるが、「*n*」と「*no*」に前接する単語の語末が母音のものと子音のものがあるという事はどのような事なのであろうか。

そこで、更に「*n*」と「*no*」に前接する単語(前掲の(1)―(2))を通覧してみると、「*n*」に前接する単語の末尾は「*-a, -o, -e*」の母音を有するものに限られている事に気がつくのである。下線を施した「526 *Yunkot* (中の事)」だけが「*no*」母音を有していて例外となっているが、その理由については三節で述べる。一方、「*no*」に前接する単語の末尾は既述のとおり子音に限られているのであるが、更にその単語を通覧してみるとそれらは語末に「*-a, -o, -e*」以外の母音乃至は撥音を有していたであろうと思われる単語である

ように思われる。前掲の資料によってこれを具体的に纏めておくと、「no」が接続するのはもともと、①キ・ギ・シ・チの語尾を有していた語の後に続くとき、②ク・グ・ス・ルの語尾を有していた語の後に続くとき、③撥音を語尾に有していた語に続くとき、という事になる。

ここで思い出される事は、既に村山七郎氏等も指摘<sup>キ</sup>されているとおり、『日本語会話入門』を初めとするゴンザの諸著作において①②の条件を有する単語は全て語末の母音が無声化しているという事である。「no」の前接音が全て子音であったというのは実は前接音の母音が無声化し、その結果なのである。つまりは無声化した音節或いは撥音に接続する場合には助詞の「の」は撥音化せず、無声化しない音節に接続する場合には「の」は撥音化するという事になるのである。

助詞「の」が、前接する単語の語末によって「no」で出現したり「ko」で出現したりする現象については右述のとおりであるが、又、一方(2)―Bのような例外もある。これはどのように考えるべきであろうか。

そこで(2)―Bの例をみると、

je (家)・ki (木)・ya (手)・o (王)・u (符)

のように一字語或いは、

karakui (からくり)・tidai (左)

のようになりから転化したイの語末を有する語に限られているのである。前者の場合、「jen」(家の)・「kin」(木の)のようになると、「家十の」「木十の」という二語の結合形式である事が不分明となってしまうために、これを避ける方向で力が働いたのではなからうか。このために「no」が接続するのではなからうか。後者については柴田武氏のように、二重母音のあとの部分(この場合りか

ら転化したイ)を子音素<sup>ニ</sup>として取り扱ったほうが色々の現象を説明するのに都合が良いとする立場がある<sup>キ</sup>。この場合も柴田氏の立場に従えば、子音終止の語の後に「no」が接続する事となり、必ずしも例外とする必要はなくなるであろう。つまり、(2)―Bは一見例外的なようでありながら、日本語の、更に限定すれば薩隅方言の事情に照らしてみると決して例外とはいえないのである。

以上みてきたように、『日本語会話入門』に出現する助詞の「no」と「ko」の分布は日本語の、更にいえば薩隅方言における一定の条件によって説明する事が出来るのである。という事はこの二種の「の」は薩隅方言との関わりにおいて考察されるべきものであって、単に表記的なものではないという事を示しているという事になりはしないだろうか。

そしてこれは前接語の長さ<sup>キ</sup>と語末音とに大きな関わりを持った現象といえる事となる。つまり、前接語が一字語の場合(前掲(2)―Bの場合)或いは語末音が子音である場合(前掲①②③の場合)或いは二重母音のあとの部分である場合(前掲(2)―Bの場合)には「no」が接続し、語末音が母音である場合(前掲(1)の場合)には「ko」が接続するという現象なのである。但し、『日本語会話入門』に出てくる語彙量はそれ程大きなものではないので、前掲①②③以外の場合はどうなるのであるかという疑問も生じないわけではない。そこでゴンザの他の著作——特に語彙量の多い『新スラブ・日本語辞典』について調査してみよう。

三 『新スラブ・日本語辞典』の場合と助詞「の」の撥音化の条件

村山七郎氏による『新スラブ日本語辞典』の転写方法によれば「ノ」は「ノ」で「コ」は「ン」で転写される。そこで先ず「ノ」が接続する単語の語末音を数値に纏めて示す。

『ノ』が接続する単語の語末「非」字語

- ーキ<sup>△</sup>3 4 |ーギ<sup>△</sup>9 |ーシ<sup>△</sup>7 5 |ージ<sup>△</sup>8 |ーチ<sup>△</sup>3 5 |ーニ<sup>△</sup>1 3 |
  - ピ<sup>△</sup>6 |ーミ<sup>△</sup>3 1 |ーリ<sup>△</sup>5
  - ーム<sup>△</sup>4 2 |ーグ<sup>△</sup>9 |ース<sup>△</sup>1 |ーズ<sup>△</sup>1 1 |ーツ<sup>△</sup>2 6 |ーフ<sup>△</sup>4 |ーブ<sup>△</sup>7
  - 7 |ーム<sup>△</sup>1 4 |ール<sup>△</sup>2 2 |ープ<sup>△</sup>4
  - ート<sup>△</sup>1 3
  - ーソ<sup>△</sup>9 7
  - ーイ(ヘユ)2 |ーイ(ヘリ)4 1 |テオイノ(手負いの)1
  - イエヴレイノ(エヴレイの)1
  - ①ナカノ(中の)1 |ワタノ(綿の)1 |ナマノ(生の)1
  - ②フォドケノ(仏の)6 |カネノ(金の)1 |ヤマメノ(病の)1
  - ③カテッポノ(片一方の)1
- 以上のように①キ・ギ・シ・ミ・リのように語末のイ母音が無声化したもの、②ム・グ・ス・ズ・ツ・フ・ブ・ム・ル・プのように語末のウ母音が無声化したもの、③ン、④二重母音のあとの部分のイ(ヘユ・ヘリを含む)、には「ノ」が後接するのである。これは前接で導き出した結果と一致し、具体例を補うものとして位置付ける事が出来よう。「ート」が例外的なように思われるかもしれないが、これは『新スラブ・日本語辞典』の表記の方針が「ー」を「ート」で転写するという事であるからである。母音の無声化した音節を表している事には変わりはない。

ところが●印によって示したように若干の例外がないではない。「ナカ(中)」のようにア母音の語尾・「フォドケ(仏)」のようにエ母音の語尾・「カテッポ」のようにオ母音の語尾に「ノ」が付いている例もあるのである。しかし、これらの占める割合は $\frac{1}{20}$  (5%)に過ぎず、全体に及ぼす例外とは言えないのではなからうか。

次に「ン」が接続する単語の語末音を纏めて示すと、次のようになる。

『ン』が接続する単語の語末「非」字語

- ーカ<sup>△</sup>1 7 |ーガ<sup>△</sup>1 |ーサ<sup>△</sup>1 1 |ーザ<sup>△</sup>1 |ータ<sup>△</sup>2 8 |ーダ<sup>△</sup>9 |ーナ<sup>△</sup>1 3 |ーファ<sup>△</sup>5 |ーバ<sup>△</sup>1 4 |ーマ<sup>△</sup>2 4 |ーヤ<sup>△</sup>3 |ーラ<sup>△</sup>2 8 |ーワ<sup>△</sup>1 4 |ーシャ<sup>△</sup>5 |ージャ<sup>△</sup>3 |ーク<sup>△</sup>ワ 2 |ーパ<sup>△</sup>5
- ーケ<sup>△</sup>2 5 |ーゲ<sup>△</sup>4 |ーテ<sup>△</sup>1 |ーデ<sup>△</sup>3 |ーネ<sup>△</sup>2 0 |ーベ<sup>△</sup>7 |ーメ<sup>△</sup>2
- 1 |ーイエ<sup>△</sup>2 9 |ーレ<sup>△</sup>1 4 |ーシェ<sup>△</sup>7 |ージェ<sup>△</sup>3 |ーチェ<sup>△</sup>2 |ーウエ<sup>△</sup>3
- ーコ<sup>△</sup>1 8 |ーゴ<sup>△</sup>1 6 |ーソ<sup>△</sup>3 |ート<sup>△</sup>1 4 4 |ード<sup>△</sup>9 |ーノ<sup>△</sup>1 1
- ーフォ<sup>△</sup>2 |ーボ<sup>△</sup>1 |ーモ<sup>△</sup>1 1 |ーヨ<sup>△</sup>5 |ーロ<sup>△</sup>3 2 |ーショ<sup>△</sup>1 1
- ージョ<sup>△</sup>1 |ーギ<sup>△</sup>2 |ーヲ<sup>△</sup>1 9
- チチント(乳のと)1 |フタチン(二爺の)1 |ワルカタクミン(悪いたくみの)1
- ソクウイント(続飯の)1 |ファラグルイン(腹狂いの)1
- ツンブン(つんぼの)2 |コシエン(胡椒の)1 |キニエン(昨日の)1 |キュン(今日の)1 |チェッパン(鉄砲の)2
- トトウン(小児の)2 |イェントウン(遠島の)1
- ジュン(自由の)1 |ゴシジュノ(ごんじゆの)1 |シユン(朱の)1 |サンジュン(三十の)2 |ニジュン(二十の)1 |ファチジュン(八十の)1 |ロクジュン(六十の)1 |チュン(中の)

ここにおいても前節で導き出した条件を確認する事が出来る。しかし、一方で●印で示したように例外も見られる。例えば「チチ（乳）」のように語末がイ母音でありながら、「ン」が後接しているのである。これらはどのように考えれば良いであろうか。

これら●印のついた例のうち、「ワルカタクミン（悪かたくみの）」を除けば、全て「ン」の前接音に母音の無声化が生じていない語なのである。語末母音の無声化が生じていない語に「ン」が後接しているのである。つまり、「タクミン」を除けば、これらも必ずしもこれまで述べてきた条件に反する例とはいえない難いとしなければならぬ。むしろ、何故このような語には母音の無声化が生じなかったかという問題のほうが難しいと言えるかもしれない。

「ツンブ（蟹）」は「パウ（坊）？ポウ（ブウ）」という変化が生じたものと思われる。「コシュ（胡）」も「コショウ（コシュウ）」という変化が想定出来る。「キニユ」「キュ」も同様の変化が考えられる。上村孝二氏は「チェツプ（鉄砲）」を開合のあわない例とされているが、「砲」字は効韻所屬字で「アウ」が期待されるためであろう。又、現在も開合の区別を失っていない新潟県方言においても「鉄砲」は開音形で伝えられているという<sup>13</sup>。こうしてみると「テツパウ（テツポウ）（テツプウ）」という変化を辿ったのであろうか。前述の「パウ（坊）」と同じように開音から才段拗長音を経て更にウ段拗長音に変化している。共に唇音であるという事と関係があるのであろうか。

以上については、才段拗長音から（一部開音から？）ウ段拗長音へ変化したものであり、ロシア文字の表記には現れていないが実は長音であったという可能性があるのであるか。それ故に、或いはかつてそうだったからこそ、母音の無声化が生じていないので

はなかるうか。こうしてみると、少なくとも形態音韻論的には長音は独立の単位を形成していたとしたほうが良いと思われるが、如何であろう<sup>14</sup>。

又、「ウィ」の場合には語末母音の無声化が生じていないのであるが、『新スラブ・日本語辞典』によればこれは中舌母音の「*ы*」を表記したものであるから、二重母音のあとの部分とするのは適当ではない。二重母音が融合してしまっていて一つの単位に変化しているのであろう。それ故に母音が無声化していないのだと思われる。「トトウ（小児）」「イェントウ（遠島）」は恐らく「*т*」を転写したものであって、「ツ」とは別の音と考えられる。前者については分からないが、後者については「（島）タウ（トウ）（トウ）」の変化を想定出来る。これらもロシア文字の表記には反映されていないが、長音であったのではなかるうか。

更に、語末の「*ш*」「*ж*」「*ч*」も、前述のようにロシア文字の表記には現れていないが、実は長音であったという可能性が相当大きいのではなかるうか。それ故に母音の無声化が生じなかったものと思われる。前節で例外とした「*526 Yunkoi*（中の事）」も同様に考えて良いのではなかるうか。「*フタヂ*（二爺）」も「*チ*」という長音であったかもしれない。それ故母音の無声化が生じなかったのではなかるうか。

「チチ（乳）」に何故語末の母音の無声化が生じなかったかという点については良く分からない<sup>15</sup>。

しかし以上のように考えてくると、例外と考えられた例の中で、前節で得られた条件を理由なく破っている真の例外と呼べるものは「タクミン」のみである。「タクミ」のみが語末母音の無声化が生じているが「ン」が後接する唯一の例外という事になる。このようにしてみると全体に対する異例の割合は「633（0.2%）」であり

極めて低率であるといえはしないだろうか。  
次に一字語の場合である。

「ノ」が接続する単語（一字語）

- カ1 ファ3 マ1 チャ2
  - キ9 ジ2 チ3 ニ1 フィ8 ミ4 シ3
  - ス1 フ5 シュ1
  - ケ4 ネ1 フェ1 メ4 イエ13 チエ4
  - オ5 ゾ1 フォ1 ジョ1
- 前節で述べたように一字語には「ノ」が後接するといえる。一方、次のような例外も存在する。

「ン」が接続する単語（二字語）

- ガン（鵝の）1 ナン（名の）2 ナン（菜の）1 ケン（毛の）
  - ー1 ネン（値の）1 シェン（背の）1 オン（麻の）1 オン（王の）1 ゾン（象の）1
- これらには何故「ン」が後接するのかその理由については良く分からない。ただ「オ（王）」「ヤ」「ゾ（象）」はロシア文字の表記には現れていないが長音であった可能性があり、一字語として処理して良いかどうか疑問の残るところである。但し、この二例を除いたとしても異例の率は $\frac{8}{88}$ （ $\frac{9}{90}$ ）で、他の場合に比較するとやや高めである。

前節で一字語に「ノ」がつくというのは、二語の結合形式であるという事を明らかにするという力が働いたためなのではないかと推定した。このような力は、無声化しない語末には「ン」が付くという方に逆行するものであり、異なる方向に働く二つの力の間で「ゆれ」が存在する事が想像される。これがこのやや高めの数値に表れたものではなからうか。しかし、一字語には「ノ」が接続するという傾向そのものには抵触するとはいえそうにないと思われる。

四 現在の九州諸方言における助詞「の」の撥音化

——『全国方言資料 九州編』から——

以上、『日本語会話入門』と『新スラブ・日本語辞典』によって知る事が出来た助詞「の」の撥音化と非撥音化の条件を纏めておこう。

助詞「の」が撥音化して「ン」となるのは、語末に母音のある語（二重母音を除く。長音は含む）に接続する場合である。そして撥音化せず「ノ」のままであるのは、一字語或いは語末の母音が無声化したもの（①キ△・ヤ△・シ△・ジ△・チ△・ニ△・ビ△・ミ△・リ△／②ク△・グ△・ス△・ズ△・ツ△・フ△・ブ△・ム△・ル△・フ△）や語末が撥音である語に接続する場合、という事になる。このように語末母音の無声化などによって助詞「の」の撥音化が条件付けされるとすると、これまで述べてきた規則的な助詞の「の」の撥音化は、語末母音の無声化などが生じて以降に発生した現象となるのかもしれない。

それでは現在の鹿児島方言においては、助詞「の」の撥音化はどのような状況を呈しているのだろうか。手近なところで『全国方言資料 九州編』に収録されている鹿児島市方言の場合について調査してみると、次のようになる。

「ノ」が接続している語

- 自由会話1 コノヘン（辺）・ムカツ（昔）・イワシ（鱈）・スイレン（睡蓮）・イッキヨイ（勢い）
- 自由会話2 ゴガツ（五月）・シン（新曆）・アツマツ（あくまき）
- ー2・●ハナ（花）
- あいさつ アツ（明日）・ヨ（夜）・カルカン（軽菓）・アッス（明日）・マイニツ（毎日）・ニンゲン（人間）

「ノ」が接続してゐる語



自由会話1 ●トチ(土地)・ヤド(宿)・オトコ(男)・シヨチ

ユ(焼酎)ノ

自由会話2 イマ(今)2・ヤド(宿)・ウメズ(梅酢)2・ン

メ(梅)・モモ(桃)

あいさつ アンタ(明日)3・アヒタ(明日)・センプーキ(

扇風機)・ホカ(他)

ゴンザの場合とほぼ同様の傾向は見られるのであるが、●印を附した語はゴンザの条件においては例外となってしまう語である。ゴンザの諸著作が薩隅方言のどの地域の方言を反映しているかという事に関しては具体的には未だ特定出来ない<sup>3)</sup>ので、現代の鹿児島市方言と比較して安易に結論を導き出す事には慎重であらねばならない。ただゴンザの諸著作の場合、異例の割合が極めて低いのに対し、現代諸方言の場合異例の率が高いように思われる。鹿児島市方言などは共通語の影響などによって、かつてははっきりしていた助詞「の」の撥音化が次第に乱れていく傾向にあるのではなからうか。或いは『全国方言資料』に採用されている鹿児島市方言の話し手が「旧中級士族出の人たち」<sup>4)</sup>であるのに対して、ゴンザは「舵手の息子」<sup>5)</sup>である。この間の社会的な位相差が見られるのかもしれない。

それでは前節までに述べてきたような形態音韻論的な助詞「の」の出現の仕方は、九州方言の中でどのような位置を占めるのであるうか。

『全国方言資料 九州編』の「自由会話」を対象に助詞「の」の形態を纏めると表「1」・「2」のようになる<sup>6)</sup>(地点は①～⑬として示した。①福岡県福岡市博多、②福岡県三井郡善導寺町、③福岡県築上郡岩屋村島井畑、④佐賀県佐賀郡久保泉村川久保、⑤佐賀県東松浦郡有浦村、⑥長崎県南高来郡有家村、⑦長崎県北松浦郡中

野村、⑧熊本県熊本市中唐人町、⑨熊本県上益城郡浜町、⑩大分県大分郡西庄内村、⑪大分県南海郡上野村、⑫宮崎県日南市飢肥町、⑬宮崎県東臼杵郡南方村、⑭鹿児島県鹿児島市、⑮鹿児島県枕崎市、⑯鹿児島県肝属郡高山町麓)。

表 [1] 「ノ」の形式の前接語の末尾音

	ン	イ	ウ	二重 母音	一拍語	ア	エ	オ
①	2	8				6		1
	1	6		2		3		5
②	1	2	1					
	1	2	1					
③		2	4		1	2		
		2	4	1				
④	1	2						
	1				1	1		
	4	4	2					1
⑤		2			1			
	7	5	2		2			
⑥	6		1		5			
	2	5	7		2			
⑦		3			2	6		1
	1	7			2	6	3	3
⑧	7	4	1	4	5		1	
	3	2	2	1		1		1
⑨	3	5	1		1	1	2	
	3		1					
⑩	7	5	1		2			1
	1	1			1			
⑪	3	4	1	3		1		1
	2	1			1			
⑫	6	3					1	
	1							1
⑬	4	11	2		1		1	
	3	8						
⑭	3	1		1 1(2)				1
	1			2(2)		1		
⑮	4	1		2 2(2)	1			
	2			1 1(2)		1		
⑯	4	1	1	1 1(2)	1			
		1		1 1(2)				

表 [2] 「ン」の形式の前接語の末尾音

	ア	エ	オ	二重 母音	一拍語	イ	ウ
①			1				
				1		1	
②	4	3					
	7					1	
③	4						
	5	1	1				
④							
		1			1		
⑤		1		1			
	3		5				
⑥	4		1			1	
	9	1	1				1
⑦	1	1					
⑧	4		5				
	3		5				
⑨	2	5	1				
			1				
⑩	1	1					
	5	1	4				
⑪	5		3			5	
	4		1			11	
⑫				10			
	3						
⑬	2	2	1				
	4		2				
⑭			2			1	
	2	1	2				2
⑮	2	5		1			
	4		4				
⑯	3	2	2				
	5	2					

用例数が必ずしも多くはないので、断定的な事は言えないのであるが、表「1」・「2」によると先ず①・⑦の地域は助詞「の」は「ノ」に統一される傾向があるので全く区別がない。⑩の地域では「ン」が多く用いられここにも区別がないように思われる。十分な調査を実施しているわけではないので安易な断定は避けるべきなのであるが、区別がないように思われる地域は九州北部であるという点は注目して良いのではなからうか。というのは、薩隅方言と同様の助詞「の」の撥音化という現象は、琉球方言においては見られない現象ではなからうかと思うからである。つまり、九州の北部と南部において「ノ」「ン」の使い分けがないという事は、やはりこの事象が独自に新しく成立したものと考えなくてはならない事を表しているのではなからうか。その時期については特定は出来ないものの先に推定したように、やはり語末母音の無声化が生じて以降の事のように思われるのである。

さて、それ以外の地域においても先行する語末音よつての整然とした使い分けが見られるというわけではないのであるが、それは痕跡すらないのかというと必ずしもそうではないようである。使い分けはありそうだが、例外もあるという状況になるのである。語末母音の無声化が活発な地域で共通語の影響が少ない地域では、前述の形態音韻論的な助詞「の」の撥音化という現象が存在するのではなからうか。ところが、その語末母音の無声化が地域によって違いがあったり<sup>2)</sup>、共通語の影響があったりするために、無声化と助詞「の」の撥音化との関連が見えにくくなっているのではなからうか。

さて、このような形態音韻論的な観点から助詞「の」の形式の出現の仕方を調査するという事は、必ずしも方言調査の重要課題ではなかつたとみえて、各地で調査されるという事はなかつたようである。

る。小野志真男氏の佐賀方言に関する次のような報告<sup>2)</sup>、

ノは先行語の制約がなければ撥音になることが多い。アメンフイヨツ（雨が降っている）。先行語の語尾音が撥音・連母音・長母音の場合や、先行語が一拍語であれば撥音にはならない。インノキタ（犬が来た）・トイノトビヨツ（鳥がとんでいる）・ヒヤノオツ（蠅がいる）・ハノイタカ（歯がいたい）。

或いは、後藤和彦氏の鹿児島岡児ヶ水方言に関する次のような報告<sup>2)</sup>、

この方言では、連体修飾格を母音で終わる語には「ヨ」を、連母音の「ニ」でおわる語には「ノ」をつけて提示する。

が目についたくらいである。

助詞「の」が、○語末母音が無声化した語に後接する場合、○長音に後接する場合、○一字語に後接する場合、具体的にどのようになるのかという点については必ずしも明らかでなかつたり、一致しなかつたりするのである。

このように各地の方言における語末音の条件と助詞「の」の撥音化との関連については未だ不明としなければならぬ点がありそうだが、これまで述べてきたように一八世紀初頭の薩隅方言に、語末音と助詞「の」の撥音化とが一定の条件によって関連していた事は明らかであるように思われる。従って、このような観点からもう一度現在の方言を見直してみてもどうであろうか。

## 五 おわりに

以上述べてきたように、現代方言において共通語の影響や他地域との交流の増大によって不透明になってきている現象が、むしろ過去の文献のほうにはっきり現れているという場合もありそうである。

このように、現在の方言に失われてしまっている現象については、文献に頼らざるを得ないとすれば、積極的に過去の方言と現在の方言との相違を記述していく事によって、中央語に直接つながる言語事象と地域独自で変化していく言語事象とが峻別され、中央語史にとつても地域語史にとつても一段上位の情報を得るといふ事になるのではなからうか。

注

<sup>1</sup> 例えば本稿の筆者はこのような立場から次のような発表をした事がある。「東国文献としての「天正狂言本」——動詞の音便形について——」（昭和六二年九月 『文献探究』第二〇号）や「背負う」「担ぐ」等の表現をめぐって」（昭和六三年春季国語学会発表要旨集）

<sup>2</sup> 注3引用書によれば次の著作があるという。「(1) 露日語彙集 1736 (2) 日本語会話入門 1736 (3) 簡略日本文法 1738 (4) 新スラブ日本語辞典 1736~1738 (5) 友好会話手本集 1739 (6) Opbis pictus 1739」。これらのうち、(1)・(2)は注3引用書に、(3)は『文学研究』六六輯（昭和四年九月 九州大学文学部）に、(4)は注9引用書に転写され紹介されている。  
<sup>3</sup> 『漂流民の言語』（昭和四〇年四月 村山七郎氏 吉川弘文館）に所収。  
<sup>4</sup> ロシア語の原文は村山七郎氏から貸与いただいたアッシュ・コレクシヨンの本のコピーによる。

<sup>5</sup>

音韻に関しては、『漂流民の言語』所収の村山七郎氏の解題・柴田武氏「村山七郎著「漂流民の言語」——ロシアへの漂流民の方言学的貢献——」（昭和四二年三月 『国語学』六八）・田尻英三氏「18世紀前半の薩隅方言」（昭和五六年三月 『鹿大教育学部研究紀要 人文社会科学篇』三二巻）。アクセントに関しては坂口至氏「漂流民ゴンザのアクセント（上）」「漂流民ゴンザのアクセント（下）」（昭和五八年一月・昭和五九年六月 『文献探究』一三・一四）・同「漂流民ゴンザのアクセント——追考——」（昭和六〇・三 『宮崎大学教育学部紀要 人文科学』五七）・同「ゴンザ」新スラブ・日本語辞典」のアクセント」（『文献探究』一六 昭和六一年九月）・崎村弘文氏「ゴンザのアクセント・私考」（『文献探究』一五 昭和六〇年二月）「ゴンザのアクセント・私考 続」（『文献探究』一七 昭和六一年三月）がある。

<sup>6</sup> 例示にあたっては、ロシア文字を全てローマ字に転写した形で示す事とし、原本のロシア文字は示さない。転写の方法は村山七郎氏『漂流民の言語』に示された方法に従う。用例は原本に附された番号に従って示す。なお原本にあるアクセント記号は省略する。

<sup>7</sup> 注3・9引用書解題や注5引用の田尻英三氏論文。  
<sup>8</sup> 柴田武氏「鹿児島県 揖宿郡願娃町」（昭和三四年一月 『日本方言の記述的研究』 国立国語研究所）に、「/n/は二重母音のあとの部分で、たとえば、[tonai]/[final/（隣）。これは母音音素でなく子音音素として扱うべきものようである。それは……その前の音素が母音音素ならば/na/、子音音素ならば/ga/と使い分けられる。そこで……/n/のあとには/na/でなく/ga/が来るから、/n/は子音音素と見るべきだ」とある。

本文中で述べるようにゴンザの諸資料において、助詞の「の」の撥音化も柴田氏の指摘される例と平行的な関係にあると思われる。

15 『新スラブ・日本語辞典 日本版』（昭和六〇年五月 村山七郎編 協力者井桁貞義 奥水則子 ナウカ書店）

16 上村孝二氏「鹿児島県 薩摩郡高城村」（昭和三四年一月）

17 『日本方言の記述的研究』二九九頁 国立国語研究所）  
加藤正信・大山貞子「新潟県方言における「オ列長音の開合」

18 （昭和三二年 『文化』二一卷四号 東北大学文学会）

19 いずれ述べる機会もあるが、助詞「の」が接続する以外の場合にも形態音韻論的には長音を独立した単位として認めたいほうが良いと思われる現象がある。

20 片仮名に転写する際に「チチ」「チチ」とあるものを誤ったのではなからうか。今のところ、そのくらいしか考えつかない。

21 造倉美穂氏の調査（鹿児島県肝属郡串良町における）によれば、一段活用系統の一音節語幹の動詞に「——やる」を付けた場合、「ネーヤツ／ネヤツ（寝やい）」「キーヤツ／キヤツ（着やい）」「ミーヤツ／ミヤツ（見やい）」「ニーヤツ／ニヤツ（煮やい）」のように語幹を長音化する場合と語幹にそのまま接続する場合とがあるという。これも語幹保持の力が働いた結果、語形に「ゆれ」を生じている例と考えられはしないだろうか。

22 昭和四一年一月 日本放送協会

23 田尻英三氏「九州弁の言語資料」（昭和六二年五月 『国文学解釈と鑑賞』）

24 『全国方言資料 第6巻 九州編』四三九頁（昭和四一年一月 日本放送協会）

25 注3引用書解題。

26 「あの」「この」等の代名詞は調査の対象から省いた。「自由会話」に限ったのは自然な発話における状態を知りたかったからである。

27 『全国方言資料 琉球編』などによったが、この点、識者の御教示を戴ければ幸いに思う。

28 『国語学辞典』（昭和三〇年八月 国語学会）「無声化」の項目によれば、「熊本市方言における母音の無声化は……語末の／＼に該当するところにはいつも、／＼に該当するところには時々見られる」（柴田武氏担当）とある。

29 小野志真男氏「4 佐賀県の方言」（昭和五八年三月 『講座方言学』9——九州地方の方言——）一〇九頁 国書刊行会）

30 後藤和彦氏「鹿児島県岡児ヶ水方言」（昭和四四年五月 『九州方言の基礎的研究』四八一頁 風間書房）

\* 本稿をなすにあたり、御意見を戴いた筑紫国語学談話会の諸先生方にお礼申し上げます。

——鹿児島大学教育学部講師——